（別紙２）

論文審査の結果の要旨

氏　名　　張　　欣

従来、中国仏教の全盛期は唐代と考えられてきた。そこで、その源流となる南北朝期から唐代を経て、せいぜい宋代頃までの仏教の研究は盛んであったが、その後仏教は衰退したと考えられ、研究はきわめて遅れている。しかし、実際にはその後仏教は民衆の中に普及し、広い範囲に大きな影響を与えて今日に至っている。それ故、元・明代以後の仏教の研究はこれからの大きな課題である。

そのような研究の現状の中で、本論文は元代の仏教、とりわけ浄土教の解明に意欲的に取り組んだものである。具体的には普度の『蓮宗宝鑑』を中心として取り上げた。『蓮宗宝鑑』は、当時の浄土教の百科全書的なものであるが、それだけに必ずしもまとまりがなく、独創的なものはあまりないと軽視されてきた。本論文は、『蓮宗宝鑑』を丁寧に分析し、その中の注目すべき思想をそれ以前の時代からの流れの中で解明するとともに、その後の展開を現代に至るまで視野に入れて検討を加え、本書の位置づけを明らかにしている。

本論文は六章からなる。第一章では、著者の普度の伝記と時代背景を検討し、第二章では普度の著作について論じている。当時の浄土教は白蓮教として異端視されていた。普度は南宋の茅子元の影響を強く受けながら、邪法と区別された本来のあるべき浄土教を示そうとしたことが、伝記から明らかにされた。第三章以下、思想的な研究に入る。第三章では「念仏者是誰」という、現代でも用いられている代表的な公案の由来を、『蓮宗宝鑑』を手がかりに探求している。その結果、最初に「念仏者是誰」という問題を提示したのは茅子元であり、禅宗の黙照禅と看話禅という二つの流れを受け、それを民衆の念仏と結びつけたところに、この公案が出来上がったということが明らかにされた。第四章では、『蓮宗宝鑑』で主張されている唯心念仏に見られる唯心浄土説の展開を明らかにし、第五章では、『蓮宗宝鑑』の臨終念仏の思想を解明している。さらに第六章では、以上のような思想史的な検討をもとに、総合的に元代の仏教の特色を居士仏教という点に見て、それが現代に至る中国仏教の大きな特徴を形作ることになると指摘している。

以上のように、本論文は従来研究が少ない元代の浄土教を、『蓮宗宝鑑』を手がかりに着実に文献を踏まえて解明するとともに、それだけに留まらない思想史的な広がりを明らかにし、とりわけ現代に至る中国民衆の浄土信仰の源流を明確にしたという点で、きわめて大きな成果を挙げている。仏教の他の潮流や道教のような他の民衆宗教との関係など、さらに検討すべき課題は多いが、以上の成果に鑑み、博士（文学）の学位を与えるにふさわしいと判断する。